

京鹿子

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成二十二年八月一日発行
通巻一〇三二号(毎月一回一日発行)



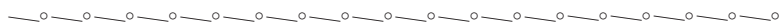
8月号

— 近 詠 —

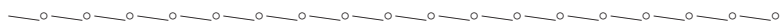
豊 田 都 峰
渥 響 集 その十二

と び か か り 来 る は 若 葉 の 日 の し づ く
青 葉 の 扉 ひ ら け ば 生 ま れ た て の 風
若 葉 よ り 出 る こ と の な き 風 あ そ び
山 越 ゆ る 雲 へ 手 を 挙 ぐ 桐 の 花
月 し ろ の 高 き 影 絵 と な る 花 桐
夏 立 ち て 一 峰 雲 を 白 く 上 ぐ





星	星	ビ	ひ	海	夏	松	瀬
涼	空	ー	と	を	落	蟬	の
し	の	ル	り	見	葉	の	音
さ	す	酌	酌	る	天	さ	も
そ	み	む	む	た	の	そ	と
ひ	ひ	沖	ビ	め	計	ひ	も
あ	と	漁	ー	サ	り	鳴	に
ひ	す	火	ル	ル	は	き	す
ゐ	ち	へ	の	ビ	い	す	く
る	の	挙	つ	ア	か	る	ひ
里	夜	げ	れ	を	ほ	山	て
棚	店	も	は	育	ど	城	心
田	の	し	山	て	に	址	太
	灯	て	の	す			
			星				



— 近 詠 —

金一封 丸山佳子

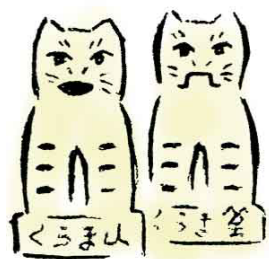
一 善 の 心 に さ せ た 落 椿

白 地 着 て 今 日 の 電 話 に 金 一 封

浮 世 と は こ ん な 日 も あ る 昼 寝 ど き

汗 を 拭 く お や 指 子 指 ま で そ の 気

こ の 辺 で 引 き 返 へ さ う よ 杉 落 葉



秀華採集

失ひしものは数へず蝌蚪に足

森 茉莉明

上七の表現は当たり前のこと。そこに何を組み合わせるか、俳句の楽しいところ。作者はなにはともあれ「蝌蚪に足」とこれまた一つの具体を組み合わせたが、なんとも言えない響合いをもたらした。

齒ぶらしは軽めに握る朝ざくら

畑 佳与

綿虫の淋しさ眉間に入りこむ

木山杏里

前句の中七の手の感触を「朝ざくら」と組み合わせる感覚は繊細である。後句の「眉間に」として箇所が作品を固定した。これも組み合わせだが、意外なものを組み合わせる、俳句の楽しみである。

支部句会参加吟

豊田都峰

呉行三句

軍港を影絵と重ねドック灼くる

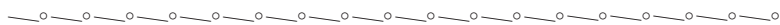
ヤマトなほ南進中なり雲の峰

海夕焼回天の黒すぎるかげ

揖斐川行六句

濃尾なる青田の涯を空とせむ

川灯台今なほみちびく青葉風



翁句碑涼風集めゐたまひぬ

茅花光る揖斐ひとはばの風となり

山の腑のごとミイラ仏涼しかり

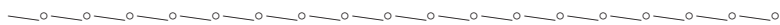
近寄りし蛍がゆゑにもえたたす

湊川三句

湊川風ますぐなる若葉道

忠臣と逆臣表裏の木下闇

十重囲む青葉や尽忠自刃址



鈴鹿 仁

望郷の風

望郷の風の語らふ柿の花

青夜きてヘツドライトの先の尖

青田風古墳すずめを邀ばせる

青梅雨や遺跡の風の彼方より

関の声いまもむかしも源氏虫

近 詠

和田 照海

花みかん

花みかんの香のあやなして野風呂岬

花みかんの風ゆき止まる遊女墓

江戸町の軒ひるがえる初燕

開け放ち旅人の海へ飾り武具

今生の刻をだいに菊芽挿す



名所図会

林

日圓

ひよいとまた深草うちは現はるる
元政の短歌を刷りし団扇かな
両親をおおぐうちはのなつめ形
うちはの柄元政庵の焼き印を
江戸後期名所図会にも描くうちは

鉄骨飲料

北村

香朗

鉄骨飲料試してをりぬさくら冷え
花冷えや鉄骨飲料てふしやいなもの
花冷えや骨の節々痛みけり
「遊心」と妻からの問い若葉風
四月に雪政治に狂いある如し

夏百目

藤岡

紫水

壬生踊りつづく限りは鉦叩く
指で読む鎌の切れ味麦の秋
叱られて籠る雛僧夏百目
夏来ると知るや狭庭の花暦
さくさくと箸にくだけで旬の筍

花

衣

松田

都青

日の永し右手は何かを待つてゐる
ひかり合ふ妻を亡くして花の夜
花衣うかうか女になつてゐし
人の持つ重みと軽さが散る
たましひが白くなるまで涅槃西風

服部

郁史

どんよりと胃を持ち歩く花の午後
鏡より余命抜け来る青葉光
柚子の花失ひし日の影ばかり
薄ものを重ね着る世の花あそび
陽炎ふやいにしえ顔の列の影

船越

美喜

松蟬に旅の昼餉の箸とめて
すつきりと話がつきし心太
杜若色を深むる細き雨
サルビアの赤を辿りて玄関へ
六月の雨美しき窓に読む



落花の雪

丹生をだまき

幾重にも破風重ねたる花の城
西行庵落花の雪はうすべに色
四月の雪大東京を化粧^{けわ}ひたり
紙魚食みし漢籍祖父は恐かりし
菜の花道ただてくくとてくくと

山田をがたま

照若葉の揺れる蔭踏み歩を数ふ
試歩練習若葉萌ゆ楠大樹まで
衣更へのはりあひもなき院通ひ
夏きざすコルセットはづす時ふやす
梅雨前線迷走試歩のはかどらず

新涼

竹貫示虹

原爆忌一番電車ゆれてくる
朝顔の紺の深さに目覺めたり
新涼の朝刊匂ふよい天氣
今朝の秋遺愛の硯なめらかに
大の字になる新涼の青疊

自己流

北川孝子

木屋町の季なしすだれ余花の屋
充電の時は今かも亀鳴けり
八十八夜慎重論の今さらに
自己流のしあわせに生き桐の花
余花残花今に深まる一語かな

青嵐

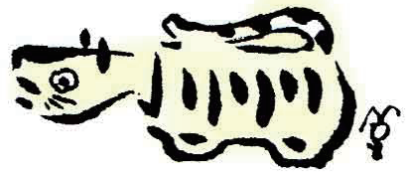
柴田朱美

片腹を削られし山青嵐
青嵐無人の遊具廻りづめ
青嵐や幾たび人に叛かれし
青嵐身の内の絃掻き鳴らし
青嵐城にをんなのものがたり

追慕

伊藤希眸

さくらんぼ追及権を得たやうに
追慕てふ言葉の甘し藪蚊打つ
天瓜粉持つて追ひし子追ひつけず
追試了へ大の字に寝る木下蔭
初秋の川妣への追慕流したる



京鹿子集

豊田都峰選

枚方 森 茉莉

鯉のぼり利根の流れを真ひとつに

葉櫻となりて海鳴りばかりなる

母の日に花選ぶ医師余念なし

春塵や友との時間あとわずか

子のたより遠き日の我夏帽子

日本より届きし若芽レシピ付き

春の夜誰もが少しほろ酔ひて

文届く三寒四温まだ続く

一人旅利根川岸に春送る

荒れ寺に雪柳あふれ里思ふ

鎌倉 畑 佳与

歯ぶらしは軽めに握る朝ざくら
どの風にも応へてをりぬ糸柳

長電話ほどよき距離に蝶ふたつ

耳すこしあいまいなんです春しぐれ

綿虫の淋しき眉間に入りこむ

慟哭の背後夕焼溜まり出す

東京 木山 杏理

渋谷 東 秋茄子

アヲ 伊吹 之博